關西身延妙傳寺誌

全

187
143

西晉史略

村雲尼公御染筆

京都本山西身延妙傳寺畧圖

平安社
大極殿
如意嶽
比叡山
御夏祭堂
方丈
居間
庫裡
客殿
玄関
内玄関
本堂
裏門
七面堂
井戸屋形
表門
門守
鐘楼堂
妙釈院
玄祥院
回立院
龍嶽院
本光院
王樹院

緒言

余は學生なり偶庚子の夏休暇を幸ひ京都に遊ひ妙傳寺に足を止めぬ折しも篤信の士川端柳雨君と會し曰らく妙傳寺の絳起や重く且つ正し然るに近來寺門の荒廢と共に此寺を知るもの少く末々になりなば西身延のいはれをも知るものなきにまでいたらんもはかられず君の來られしころよきをりなれ遊びのまにく關西身延てう由緒のぬき書をものせられたしとの事にいなまれず痩馬の重荷を帶びしのみかかてゝ確なる古書類の徵すべきものとてなく綴りし事なれは拙筆杜選の罪は免れねどたゞわすれがたみにせしもの

なれは讀者請ふ之を諒せられよ

明治庚子の夏

編者識す

關西身延誌目次

第一項　妙傳寺略緣起
第二項　沿革
第三項　歷世
第四項　由緒
其一　皇室
其二　公方將軍家
第五項　勸請佛
第六項　寶物
其一　本尊類
其二　書畫類

第七項　鏤刻銘
第八項　雜部

關西身延妙傳寺誌

安田貞教編纂

第一項　妙傳寺略縁起

抑も當山の縁由を尋るに人皇百四代後土御門天皇の御宇將軍足利八代義政公の執政卽文明九丁酉年身延山十一代の主行學院日朝聖人の御弟子圓教院日意聖人の創草する處なり

夫身延の山や　宗祖幽棲九年誦經說法行化の地にして自ら眞の靈山事の寂光と稱し玉ふ靈窟なり故に祖書に曰く

釋迦佛は靈山に居して八ヶ年法華經を說き玉ふ日蓮は身延山に居して九ヶ年讀誦なり略吾此山は天竺靈山にも勝れたり然れば吹風もゆるく草木も流水の音迄も此山には妙法五字を唱へずと云ふ事なし日蓮が弟子檀那等此山を本として參るべし此則ち靈山の契りなり又曰縱ひ日蓮何處に死し候とも九ヶ年の間心安く法華經讀誦し奉り候山なれば墓をば身延山に建させ玉ふべし未來際迄も心は身延の山に住むべく候

又曰く我門弟等身延の寺を以て本寺とすべし我常に此山に住して知恩報恩の人を守護すべし爰を以て日蓮が後世の門徒在々処々に散在して此經を弘通せん者は先づ此の本寺に參詣してかたの如く知恩報恩の道に達して偖次に弘通を思ふべし其義なくんば偏に弘通成し難し弘通成就すべからず中略根本の本寺を忘れん門弟は何事も徒ら事なるべし逆路伽耶陀の者にして皆惡道に墮つべきなり云云

噫此書の丁寧反復慈訓の意垂誡の切なる誰か感激に咽ばざるものあらんや茲を以て法流を酌む緇素は必す先づ足を此地に運んで滅罪生善二世の大願を祈り以て知恩報恩の責を塞ぐべきなり宜なる乎身延の地荊籛路を蔽ひ巖石逶迤するの處松杉鬱蒼の間香烟牽牽岫雲に接し法鼓鼕々として溪聲に和し群參月に加

り日に多く實に本朝の靈山なり然れとも關西の徒は雲山萬里を隔て京師を發して三十七驛竹杖雙鞋歩々艱難櫛風沐雨左折尚十三里の長程崎嶇峻坂を經て漸く彼地に到るを得況んや四國九州よりするに於てをや此を以て翁媼詣でんとすれば子孫杖に縋り幼者賽せんとすれは夫妻袖を牽て止む此を以て知恩報恩の思ひ内滿つれども情に纏綿せられて空く世を終り知らず逆路伽耶陀の罪を造るもの亦た少しとせず是を以て開山日意聖人深く此を慨き思を焦かして御師日朝上人と謀り文明九年の春　宗祖の御舍利を分頒して吾山を開き普く關西信徒の素願を充たし本化良緣

を結ばしめ玉ふ所以なり夫れ舍利の功德は戒定惠の薫修する處最上の福田なり況んや我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん等と(開目抄)誓玉ひ身輕法重死身弘法即ち身は輕けれは人打はり惜むとも法は重けれは必ず弘まるべし法華經弘まるならば屍かへつて重かるべし屍重くなるならば此屍は利生あるべし等(乙御前御書)等御聖訓に違はず盡未來際の今日靈驗愈〻顯に末法萬年の闇を除き玉ふ御眞骨を廣供養舍利咸皆懷戀慕而生渴仰と尊み安置し加之同時に身延奥院勸請の七面天女と同木同作の靈佛をも移し奉り以て當山を創め玉ふ是れ此の御

靈骨に由て此寺あり此寺あつて此御靈骨を奉安せしに非ることは普く諸人の知る所たり之に由て此を觀れば東西百里の天涯を隔て風土の異りありと雖も延山と吾山は兩山一寺にして寸毫も異なる事なし此を關西身延と云ひ妙傳寺と稱する所以なり

第二項　沿革

開山圓教院日意上人創めて京都一條尻切屋町に地を卜し堂塔伽藍を建立し此山を開き(此第一妙傳寺)上人在職二十三年衣鉢を二祖淨性院日胤上人に傳へ玉ふ上人位を繼ぐ三十六年にして又三祖日肝上人に讓り玉ふ後人皇百六代　後奈良天皇の御宇足利拾二代將軍義晴公天文五丙申年七月台徒法亂の兵燹に罹り寺門悉く烏有に歸す仍て難を泉州堺に避け同十年辛丑年歸洛し又地を換へ西洞院四條下る町(今に妙傳寺前町と呼ぶ)に再興し先きの如く　御靈骨及ひ七面天女を安置し奉る(是第二妙傳寺)爾後第六代慈眼院日惠上人の代人皇百七代　正親町天皇の御宇關白豐臣秀吉公の命に依り天正十九辛卯年三たび地を京極二條上る町に移る上人拮据經營の功に由つて寺觀大に備はる一時不思議の靈夢に依つて錐揉高祖の靈像を感得し(緣起別記の如し)吾山に安置し奉る上人の代一條殿及四條殿の御菩提處となる(是第三妙傳寺)其後第二十九代住心院日義上

人の法嗣中卽人皇百十二代　東山天皇の御宇將軍源家綱公寶永五戊子年三月八日洛中大火の際共に災に罹り伽藍悉く灰燼す仍て現今の地卽二條川東に移る（是第四妙傳寺）上人在職中山門大に榮ふ三十五代了遠院日勤上人說法一萬座に及ひ愈々伽藍の建築に勤む今の本堂亦上人の代に成る其結構壯麗人の知る處なり其後物換り星移り近來に至て寺門荒廢し殆んと西身延の寺影を止めざるに至る明治二十七年一月當貫主日通上人晋山已來寢食を忘れて此か回復を謀らる篤信有志の外護檀越亦雲の如く聚り僅々六七年の間寺門大いに昌へ稍々舊歎を免るゝを得たりと雖も未

た足れりとするを得んや此を要するに草創已來茲に明治三十三年に至て星霜を閱する四百二十四年西洞院に再轉してより茲に三百六十五年京極ニ三遷してより茲に三百十年寶永五戊子年今の地に四遷してより百九十三年開山日意上人より現住日通師に及んで傳燈六十四世此を吾關西身延妙傳寺の沿革とす

第三項　歷　世

開山圓教院日意聖人諱は日意字は法鏡圓教院と號す文安元甲子年に生し初天台宗の翹楚にして叡山の奮頭たり勢州桑名妙蓮寺を領す聰敏絕倫博識宏才其議論の席に臨むや辨華燦然として部折明白なり偶〻慈

覺大師理同事勝の說に至つて疑團胸に塞り之れを糺すに人なし吾朝尊者少年の時嘗て錫を叡嶽に掛け學譽頗る高し上人或夜夢に一僧を見る告て曰く吾之を語らん吾其の疑を晴さん來れと上人曰仁は誰ぞや僧曰吾は是れ身延山主日朝なりと上人夢覺め且つ驚き且つ悅び輕裝して身延山に詣る朝尊者預め是を知り大衆に命して曰今日吾か山次の主到る汝等慇懃に此を迎へよと衆徒命を承て出るに果して上人を見る日意上人も亦曰山主必す吾か來るを竢つならん疾く往て之を告よと上人到るに朝尊者出て之を邀ふ初對の禮を言はず燠寒を語らす先づ此の問を擧て論談往復三晝夜に及ぶ日意上人豁然として疑團氷解し細に慈覺の謬を知り速に別頭芳區の人となり朝尊者の門弟となり尋て十二代の主となる在職二十年偶〻痾を得永正十六年己卯の年二月三日專心唱題し安祥として寂す世壽七十有六妙傳寺は文明九年春上人の手に依つて成るものなり後世我宗中興の三師として譽れ高く世稱して向尊者の再生とす

第二代淨性院日胤聖人　上人職に在る廿六年寺門大に昌ふ天文三甲午七月六日示寂す

第三代眞淨院日肝聖人　在位前後十五年人皇百六代後奈良院御宇足利十二代將軍義晴公代天文五年台

徒法亂の兵燹に罹りしが同十年辛丑地を換へて西洞院に再び此山を開き堂宇舊に倍して壯大に寺も此より愈〻榮ふ惜哉天文二十辛亥十二月十五日病を得唱題合掌して逝き玉ふ

第四代法光院日請聖人　師は天文二十一年日肝上人の後を承て晋山し天正十八年庚寅三月十四日示寂す

第五代妙勝院日曉上人　日請上人に代つて法燈を繼き文祿五丙申七月十二日遷化す

第六代慈眼院日惠聖人　上人諱は日惠字は遠了慈眼院と號す身延十七代慈雲院日新上人の上足なり壯年にして飯高檀林に入り夙に龍象の名高し後日新上人の命に由つて當山に晋す後亦鎌倉本覺寺の主となる寛永元年甲子秋偶〻二豎の侵す所となり復た起たず十二月五日に化す師學深く德高ふして名聲四方に嘖嘖たり人皇百七代　正親町天皇の御宇關白秀吉公天正十九年命に依て西洞院四條上る町に移る此時一條殿幷に四條殿の香華院となりたり實に當山の中興たり

第七代智寂院日豪聖人　慶長十九年六月十九日示寂す

第八代心性院日遠聖人　上人諱は日遠字は堯順自ら一道と號す姓は藤原石井氏京兆の人なり元龜三壬申

に誕す一如院日重上人を師として事ふ幼にして顯悟後ち南都北嶺に學び八宗の奥義を究め學德殊に高し職を當山に承るや緇素信徒雲集し寺門大に壯麗を加ふ後延山に進み亦大野本遠寺に退隱す請に仍て再び祖山に住す元和元年吾宗淨土宗對法論の時の如き偶偶將軍の怒に觸れ磔刑に處せらる上人刑に臨て神色自若たり官恐れて之を宥す其後不受不施法亂を鎭定せし如き偉大の功績枚擧に遑あらす眞に護法の干城にして宗門中興の師と仰く亦宜なる哉寛永十九年壬申三月五日病を得て遷化す世壽七十有一

第九代顯是院日要聖人　幼にして智行の譽高く推されて正東且林の講主となる後當山に瑞世し元和元年日遠上人東照公の命を奉して祖山に住し幾もなくして日要上人の命を承て晋住し同九癸亥年七月五日疾を感して遷化す享年四十八

第十代了眼院日盛聖人　當山第六世慈眼院惠師の門下なり推されて當山の主職となる慶長年中東都瑞輪寺に轉じ後復た錫を反して此山に住す元和五年己未三月二十七日疾を得て遷化す世壽五十六歳遺骸を鳥邊山に飲む

第十一代妙性院日在聖人　寛永元年甲子五月十四日に寂す

第十二代東光院日眞聖人　諱は日眞字は惠性永祿元年戊午下總國佐倉に生る延山寂照乾師の弟子なり聰敏英邁當山第十二の法燈を嗣ぐ天正十三年乙酉豐公の部將加藤清正今の肥後本妙寺を攝津難波に築き上人を以て開祖とす肥前大村主因幡刺史純信も上人に就て宗を改め寺を立つ今の大村本經寺是也其他島原護國寺豐後法心寺府中妙泉寺大覺寺川尻法宜寺水俣法華寺等皆上人の草創に關る處なり文祿三年清正公朝鮮出陣せらるゝや上人亦僧徒十餘人を率いて渡り陣後日夜精勤して勝軍の祕法を脩す慶長三年凱旋の後公深く眞師の勞を多とす　陽成天皇御感尤も深く

嘗て紫袍を賜ひ德澤天下に普く宗風大に揚る老を洛北に養ひ寛永三年丙寅四月二十三日病革り遂に遷化す世數六十有三

第十三代雲雷院日實聖人　大坂雲雷寺の開基にして良岳坊創立の功に依て當山に瑞世す偶寛永五戊辰五月十二日安祥として遷化す

第十四代妙性院日遥聖人　正保元甲申年十一月十二日示寂す

第十五代法性院日勇聖人　姓は平氏西洞院參議時直卿の二子にして幼名を梅松磨と稱す始め甲州身延山に登り顯是院日要上人の弟子となり年十五薙髮す頴

悟神の如く攻學數年學行大に進む後當山に晋住す諸堂を改築し伽藍大に盛へ行化日々に篤く殊に一條殿四條殿の歸依を受け且つ人皇百七代　後水尾天皇の妃東福門院嘗て上人を召して法花經を講せしむ御感尤も厚く自ら御衣を裁し袈裟を作り此を賜ふ是本宗服制紫紋白袈裟の嚆矢なり此時本宗の教學大に衰へたるを慨き大檀那東福門院幷一條四條兩殿の外護を得て山科に栴檀林を起し此が講主となる此より宗風大に振ひ遠近貧笈の徒逐日に多く實に中興の大德なり惜哉天年を借さす慶安三庚子年二竪の侵す處となり遂に十二月二十三日盡焉として化を遷す年四十有

七

第十六代了智院日健聖人　上人聰惠敏達苦學年を累ねて後當山の法嗣となる其學に篤き嘗て健抄其他の著書あるを以て知るべし天和三年九月二十九日逝

第十七代寂遠院日通聖人　師諱は日通字は玄海俗姓は松田氏日勇聖人に師事し幼にして學を鷹峰檀林に受け進で山科檀林玄文の講主となり推されて當山に瑞世す居る事數年偶關東飯高檀林化主を缺く仍而遠く師を迎へて其職に擧ぐ此より教學亦揚る嘗て摩訶止觀解指要抄解の著書あり後池上に進み亦祖山の法主となる痾を武州瑞輪寺に養ひ遂に起たすして寂す

春秋六十有六西岡眞如寺相の金井法傳寺師を尊んで
開山とす
第十八代良靜院日令聖人　幼にして頓悟博識後中村
檀林の講主となり又平賀本土寺に進み尋て當山に晋
住す永祿六癸亥年十一月十九日遷化す
第十九代詮量院日陽聖人　字を幸温と呼ぶ中村檀林
講主より轉じて當山に瑞世す延寶八庚子年九月十二
日疾を得て寂す
第二十代寂耀院日啓聖人　諱は日啓字は輪匠寂遠通
師に事ふ夙に飯高檀林に在るや龍象の譽高し次て山
科檀林化主となり後師を進めて當山に職たらしめん

とす師固辭再三曰山科檀林講主は師の命なり敢て職
を當山に享くるものに非ず若し强て促さば吾れ檀林
をも去んと仍止む偶烏部山廟參に託して駕を當山に
枉げしむ衆徒直に參賀す亦辭す事を得ずして晋山し
二十代の主となる在職三年道風四方に薫じ寺門亦昌
ふ偶〻病を難波に感し元祿三年六月十七日唱題して
寂す時年五十八
第二十一代智寂院日省聖人　十如院日行に就て薙髪
す少して博識宏才後寂遠通師の門に入り山科檀林の
請に應して當山に瑞世す後飯高檀林の主となる元祿
二年水戸黄門公の請に應して文句を講す十一年戊寅

祖山に進み十四年賜紫の詔を蒙り天朝に拜す正德三癸巳年夏大に旱して田園悉く龜裂す上人慇懃に請雨の咒をなし功顯空しからず民仍て敬服し德澤普く潤ふ享保六年正月十三日眠るが如にて遷化す

第二十二代養法院日成聖人　元祿二年十月十三日滅を示す

第二十三代良道院日聖聖人　延寶元年巳未十一月二十九日還化

第二十四代遠沾院日亨聖人　字は顗海洛陽の人にて寂遠通師に就て圓頂方袍す後山科檀林の請に應して當山に住し亦立本寺に移る尙洛東滿願寺を起す寶永元年日省上人の囑を稟て延山に晋住し賜紫の勅を蒙る上人の代身延の山勅願寺となる享保六年辛丑十二月二十六日滅を示す壽七十六歳防州岩國要法寺は上人の開祖なり

第二十五代養遠院日嚴聖人　寶永二乙酉年十二月十七日滅を示す

第二十六代壽遠院日遵聖人　正德二年二月十五日示寂す

第二十七代遠成院日實聖人　元祿十六年癸未八月晦日疾を得て遷化す

第二十八代寂成院日遠聖人　享保十七年子五月二十

日示寂す

第二十九代通恩院日慈聖人　寶永七庚寅年二月十八日滅を示す

第三十代住心院日義聖人　當代卽人皇百十二代　東山天皇御宇將軍源家綱公寶永五年戊子三月八日洛中大火の節共に災に罹り堂宇皆灰燼す依て京極二條上る町より現今の地卽二條川東に移り同時に一條殿深厚の因緣を以て三寶院の宮より御堂一棟寄附を得て再築の緒に就く實に上人は當山有功の先師なり享保十四己酉年五月六日示寂す

第三十一代廣宣院日迨聖人　元文四未年正月二十九日遷化す

第三十二代誠峰院日竟聖人　山科の講主より當山に移り享保十九甲寅年正月廿一日示寂す

第三十三代寂妙院日迅聖人　元祿十二年二月二十四日滅す

第三十四代遠妙院日允聖人　寛保二壬戌年十一月十七日示寂す

第三十五代大千院日眼聖人　延享四丁卯年十一月二十五日病を得て化す

第三十六代了遠院日勤聖人　博學宏才夙に樂說無礙辯を得たり當山に瑞世せらるゝや拮据焦心遊化說法

一萬座を以て能く道俗を化し寶暦十四年の春今の本堂を再築遷座の式を擧ぐ時に歳七十九其伽藍の壯大なる人の克く知る處明和八辛卯年十一月十三日遷化す

第三十七代貞妙院日總聖人　上人當山の世嗣より進で延山の主となる寛延四辛未年六月二十九日寂す

第三十八代温讓院日妙聖人　寛延二己巳年十月七日示寂す

第三十九代慈眼院日視聖人　明和二乙酉年十月三日遷化す世壽七拾一歳

第四十代妙幡院日稽聖人　寶暦十三年癸未三月九日寂す

第四十一代長養院日忠聖人　天明三年癸卯正月十三日滅す世壽六十一歳

第四十二代智律院日梁聖人　飯高檀林百六十四世の講主より當山に瑞世し天明六年丙午九月十二日寂す

第四十三代通入院日猛聖人　在職中營繕大に成る安永七年戊午十一月五日示寂す

第四十四代只信院日逢聖人　備後福山妙政寺より當山に瑞世し享和二壬戌年八月十一日示寂世壽七十有六

第四十五代靈芝院日信聖人　山科檀林素生の初祖に

して讃州高松高松寺より當山に瑞世し文化十一年戊
八月八日示寂す
第四十六代厚善院日饒聖人　加州金澤立像寺より當
山に晋董し享和三年癸亥九月二十六日示寂す
第四十七代僧祇院日逮聖人　浪華本要寺より當山に
瑞世す諸堂を營繕し寺觀益〻備はる文政元年寅八月
四日遷化す
第四十八代妙俊院日芳聖人　尾州法華寺より當山に
進む御眞骨堂を再建し莊嚴亦備る天保十二年辛丑六
月二十二日寂す
第四十九代誠興院日祥聖人　文政八年辛酉十二月十九
日一條殿下の御歸依に依りて伊豫松山法華寺より當
山に榮轉し後身延山七十世の職位を襲き弘化三年午
五月十八日示寂す
第五十代妙道院日種上人　西園寺前右大臣實季公の
子にして出水華光寺の中興開基に仰れ天保三年辰四
月十六日當山に晋山し天保六年未五月二十二日示寂
す
第五十一代止明院日祥上人　學德共に高く道風爲に
薫ず當山の住職たりしが元治元年子十月三日推れて
身延山に進み年四十八賜紫の榮を享け天朝に拜す明
治五年六月九日示寂す行年八十六歳山科妙見寺は師

の開基なり

第五十二代寶樹院日森聖人　嘉永五年子三月二十六日示寂す世壽五十一歳にして遷化す

第五十三代和玄院日皐聖人　北野立本寺より嘉永五年の春晋山し明治十二年己卯一月四日示寂す世壽七十五歳

第五十四代藏性院日兆聖人　鳥邊山通妙寺より晋山す安政五年十月五日病を得て示寂す

第五十五代戒眞院日章聖人　東都本所本佛寺に住し文久元年酉六月八日當山に瑞世し慶應三年卯五月閑居し後下總に往て示寂す

第五十六代慈妙院日遼聖人　但馬實行寺より慶應三年卯十一月十八日瑞世す明治六年酉九月十七日遷化す

第五十七代玄性院日名聖人　大津妙光寺より明治四年當山に晋山す明治十二年己卯一月四日滅す世壽八十有六

第五十八代妙種院日應聖人　伏見墨染寺より當山に榮轉す明治三十二年十二月二十五日遷化す

第五十九代一神院日穆聖人　明治十六年七月十二日示寂す榮光院日寛上人此代準歴す

第六十代正守院日眞聖人　明治十三年九月鳥邊山通

妙寺より晋山す
第六十一代全中院日庸聖人　明治十八年四月登山し
同十九年三月二十四日東京宗局詰中に遷化す
第六十二代一玄院日教聖人　明治二十五年壬辰年一
月二十四日大阪善德寺に於て遷化す
第六十三代止等院日解聖人　明治十八年四月二十一
日東寺法花寺に於て遷化す觀成院日厚上人尾州黑田
法蓮寺より進み六十三代準歷す明治十九年二月十六
日遷化す
第六十四代遠明院日通上人　明治二十七年一月名古
屋妙善寺より晋山す即當代の貫主なり

明治二十九年名古屋休玄寺住職遠充院日融上人を第
六十四世の加歷とす當代貫主の讀師なり
附言　近代に至り歷世大に錯雜して事態分明な
らず且つ徵すべきの書類なし請ふ之を諒せよ

第四項　皇室由緒

一菊御紋御挑燈　寶永二年乙酉九月
法皇御所樣御祈禱の上御願圓滿の爲め當寺七面宮へ
四條中納言より御寄附
一菊御紋御挑燈　正四西甲午年九月
法皇御所樣御局大宮殿并大小路殿より御寄附に預る
一弘化三年丙申三月二十五日　仁孝天皇御崩御の際

當山四十九世日祥上人參內獻經被仰付

公方幷將軍家由緒

寶永五戊子年三月八日洛中大火罹災後地を二條川東今の地に移す際一條殿菩提寺の緣由を以て三寶院宮より御堂壹棟幷唐破風作り玄關及灰筋土塀延長四十三間の御寄附に預る

當山四十九代妙俊院日芳上人の代天保五年二月一條殿より紫縮緬下り藤御紋所大幕三張幷白布幕二張御寄進に預る

一條順德院殿より當山を御菩提所と仰出せれ候に付網代御輿幷金紋狹箱御寄進せらる

一當山日章聖人の御代より後代貫主は四條殿御猶子と相成候上登山の事左の如し

一當家猶子之儀被免候上は上人より後代に至る迄御紋差貫幷金紋狹箱同網代輿等被所用候も不苦候事仍て一通如件

文久元年辛酉年十二月五日

四條家

小西直記剛長　在判

木下右兵衛少尉秀有　在判

妙傳寺日章御房

歸洛御免狀

妙傳寺堂舍四條西洞院事如先々興隆候上者向來一被
抽御祈禱精誠之由被仰候仍執達如件

永祿元年十二月二十一日　左衞門尉　花押

當寺雜掌

禁制之事　妙傳寺

一當手軍勢濫妨狼藉之事
一陣取放火之事
一伐採竹木非分申懸之事
右條々於違犯之輩者速可處嚴科者也仍執達如件

永祿十一年九月日　彈正忠　在判

禁制

妙傳寺　付境內

右當寺寄宿事堅被停止候上者自今以後有違犯之輩者
速可被嚴科之由所被仰候也仍下知如件

大永八年四月十九日　信濃守神宿禰　在判
散位平朝臣　在判
近江前司三善朝臣　在判

第五項　勸請佛

錐揉高祖日蓮大菩薩　靈像は中老僧日法上人の作にして其始上都興聖寺にあり此寺住僧練意は元本宗の僧にして本滿寺十二代一如院日重上人の門下たりしが後故あつて宗を轉し遂に逆路伽耶陀のものとなる故に　高祖の靈像をも敬はず厨司の天井に捨て敢て顧さる數歳一日彼徒告曰此像吾家に用なし寧ろ毀て燒くに如かすと已に斧を擧て之を截んとす時に練意衆に告け曰須く待て此像若し靈あらば吾此を試みんと偶々錐を持ち來て尊像の右肩を揉む忽ち鮮血淋漓として流る意忽ち全身麻痺して仆る然れども死に到らずして治す時に慶長九甲辰年中秋十二日也奇なる哉翌十年同月日に至つて武者吉岡武藏と怨を結て解けす各部下を率ゐて雌雄を城北紫野に決す城下の士女馳せ往て見るもの山をなす彼僧亦到り樹攀じて此を窺ふ偶ま流失右肩に中り墜落して死す嗚呼歳一年を隔つと雖も同月同日而も右肩に疵いて斃れんとは現罰響の如く威靈烈日に似たり誰が心慄せざるあらん吾山中興日惠上人一夕夢に此像を見る告曰吾僻見の家に在るに忍ひず冀くは吾を茲に移せと日惠上人醒めて呆然として半は疑ひ使を興聖寺に遣し夢事を說かしむ妙なる哉彼住僧も亦同夢を感せり依て迎て此

を妙傳寺に安置す爾來靈驗益〻新に渴仰參拜の輩所願滿足せずと云事なし回顧すれば　高祖御生身の節は委さに四箇の巨難を嘗め玉ひ今此像も又四箇度の大難に遇ひ玉ふ其の錐揉の難は小松原の蒙疵に比すべく斧を以て割截せんとせしは猶龍口の難に擬すべく數年天井の裏に潛め奉りしは伊東幷に佐州の御左遷の如なるべし　高祖木像にまで三類の敵を忍ばせ玉ふ乎思ふて此に至らば轉た感激に堪へざるなり

七面大天女　開基圓教院日意上人嘗て身延山より宗祖の御眞骨を分頒し玉ふ時此像をも俱に移し奉る靈佛にして延山七面天女とは同木同作の事は人の知る所なり緣起は右に異なるなきを以て故さらに贅せず靈驗日を遂て顯かなり

第六項　寶物

一　本尊之部

一宗祖御眞筆十界本尊　建治二年十月日　一幅
一同　佐渡百幅之內最初開運本尊　一幅
一同清正公軍中守本尊大增長天王　一幅
一同　十界本尊　建治三年之御筆　一幅
一日朗菩薩火災除本尊　延慶二年九月　一幅
一日像菩薩厄除本尊　寶曆三年五月　一幅
一日向上人筆十界本尊　永仁四年六月　一幅

一日朝上人筆十界本尊　文明四年二月　三幅對內　一幅
一日意上人筆十界本尊　永正三年十一月同　一幅
一日傳上人筆十界本尊　天文十五年初秋同　一幅
一日朝上人筆十界本尊　長享元年二月　一幅
一同上人筆　延德二年六月　一幅
一日意上人筆　文龜二年六月　一幅
一同上人筆　永正十年三月　一幅
一同上人筆　永正三年正月　一幅
一同上人筆　永正四年五月　一幅
一大覺大僧正筆十界繪曼荼羅　一幅
一曼珠院良恕法親王御筆首題　一幅

一日重上人筆　天正十一年十月　三幅對　一幅
一日遠上人筆　寛永二年十一月　同　一幅
一日乾上人筆　元和七年八月　同　一幅
一日重上人筆　天正十九年二月　一幅
一日乾上人筆紺紙金泥　慶長十一年二月　一幅
一日意上人筆　永正二年四月　一幅

歷代御本尊有數之者は此を略す

二　書畫類

一宗祖御眞筆　あしはい御消息　一軸
一同　唯我一人御消息　一幅
一同　字說五言十六句　一幅

一同　三止四請御書　一幅
一同　成佛之事御消息切　一幅
一同　從佛以下一百七字　一幅
一同　佛國品御消息　一幅
一同　麤食者御消息　一幅
一同　蜈蚣等二行　一幅
一同　末法御消息　一幅
一同　事理御消息　一幅
一日朝上人筆　眞言見聞　一幅
一日意上人筆　祖書全部　函入
一同上人筆　講演妙義集涌出品　一冊

一同上人筆　觀心本尊抄筆記　一冊
一同上人筆　止觀法華大意　一冊
一同上人筆　序品講義　一冊
一同上人筆　早勝問答筆記　一冊
一同上人筆　御消息　一幅
一同上人筆　問答祕訣　一軸
一傳教大師之筆　御經切　一幅
一日胤上人筆　開山日意上人仰書　一幅
一日勇上人筆　弘決上下二卷　一冊
一日意上人仰書　遺存日順筆　一冊
一高松中將筆　當山宛書簡　二幅

一近衛公尺牘　如日月光明　一幅
一大覺寺宮尊性親王御筆　廿八品和哥　一軸
一光明皇后御筆　寶塔品　一軸
一明宮御筆　提婆壽量二品　二軸
一一條關白忠良公御筆　提婆品　一軸
一傳繞兩師御尊翰　二軸
一遍照集　一軸
一鷹司關白御筆日蓮大菩薩　一幅
一將軍綱吉公御筆仁義二字　一幅
一近衛大山公御詠御並筆　一幅
一一條關白忠良公御歌御並筆　一幅

一近衛關白良宣公御歌御並筆　一幅
一一條兼香公御筆一遍首題　一幅
一狩野法眼永眞筆　十六羅漢像　十六幅
一佐々本玄隆筆八分字　二幅
一狩野法眼秀信筆　釋迦文殊普賢　三幅
一村雲日尊宮御筆　而實不滅度　一幅
一雪舟末葉等室之筆　十六羅漢　十六幅
一一條關白忠良公御筆　一幅
一烏山氏筆　金泥普門品　一軸
一兆殿司筆　釋迦文殊普賢　三幅
一禪月之筆　羅漢之像　一幅

一宋李龍之筆　魚籃觀音像　一幅
一大樹秀賴公御筆題目　一幅
一狩野法眼重信筆　涅槃像　一幅
一前寶鏡寺宮御筆　大菩薩號　一幅
一三代將軍家光公御詠御自筆　一軸
一土佐光貞筆　紅歌書　一幅
一成田蒼虬自筆歌并清暉添畫　一幅
一久保田米僊筆　蒼虬翁像　一幅

其他雜書畫類多略之

三　雜具類

一清正公所持陣太鼓　一個

一細川公御寄附御打敷　一枚
一征夷大將軍家宣公より拜領御服紗　一枚
一高祖大菩薩松原血染御袈裟切　一片
一吃又平筆屏風　五十三驛圖　一雙
一琴形御硯　一個
一東福門院御裁拜領紫紋白安陀衣　一函
一運慶作　二天王　二軀
一大瓢　澤宣嘉卿所持　一個
一狩野常信筆屏風　牡丹畫　一雙
一寶鏡寺宮御筆　正法華院額　一面

鐘銘

吾開山圓教院日意聖人者本臺宗獻嶽翅楚也一時猛省
謂如來懸纖祖師內鑑末法必有本化出吾所禀承之血脉
時機夫爲當耶因跨身延山行覺朝上人門質別付之旨得
無礙機用於是乎處々建本化宗旛嗣香酬○上人之法乳
文明之間洛陽桃花坊油小路傍構一梵刹頒藏
高祖大士眞骨亞福田於祖山自呼法鏡山妙傳寺所謂關
西身延山也永祿中徒地於西洞院永昌坊天正中之遷于
京極冷泉都合將向三百年元和已未歲村井宗岳鑄梵鐘
而備法器元祿戊辰秋篠田氏厚敬再改鑄之鯨吼雷轟法
雨日盛殿堂門廡煥乎望高一時寶永戊子春洛下大火寺

嬰池魚殃鐘亦隨裂乎嗚呼時歟命歟揷草已來終無祝融
之災當干是時係干是慨歎曷已乎且含官命易地于洛東
岡崎焉厥地也卑厥之地也濕搬土棧石界畔未完四衆助
我未幾址○水廻法基將足堂宇復舊追日可竢也矣況乎
別付之法久成之人法之與人既崇處何陋之有乎哉欲今
鑄洪鐘而告四方以振吾　祖風粤攝州難波信士小武氏
捨貲唱之遠近男女和之多焉乃雇冶工開鑪鞴而寶鐘不
日就矣住持某美之志爲之銘且序新基由刻之以掛高樓
伏冀法運日啓國土倍饒一切陀那志念堅固福到罔極銘
曰
至人遺澤　千載維揚　法鏡高照　妙傳孔彰

大器之造　晩成接芳　衆寶樹下　連獅子牀
象耕鳥耨　福田方將　和風吼月　侵曉鳴霜
龍峰後聳　鴨水前長　國豐民樂　共受天慶

干時寶永第七就集庚寅歳三月穀旦

正法華院廿九嗣　某　謹識

冶工洛陽釜座住
近藤丹波椽藤久

安陀衣藏函裏銘

東福門院嘗裁
後水尾帝御衣以作鬱多羅僧衣安陀衣各一領賜之日勇護持久之後以鬱多羅僧衣付之日通今藏在山科護國寺以安陀衣授之當山嗣法傳々相付至干今紫衣者吾宗講經稱聖人者著紫色菊章方袍之權輿也宗門光榮以何尚之饒感喜之餘聊記以貽之來葉享和壬戌夏

法鏡山四十五嗣法
日饒謹記

第九項　雜部

旭日山樓

樓は方丈の背にあり坐なから東山三十六峰双眸に入り朝霞晩翠の景に宜しく東北に叡山幷黑谷眞如堂を控へ東南には粟田及南禪寺の偉觀に對す碧瓦高樓の大極殿は直下に座し前に疏水の清流潺々として流れ

兩岸の翠柳水に映して觀殊に麗し若し東山銀盤を吐くの夕ならん乎坐なから赤壁の遊に擬すべく桃源仙境又外ならさるべし賴山陽先生墨客霞山老人と嘗て此にあり仰て此景を賞し伏ては著書に忙はしも朝暾殊に宜きを以て旭日山樓と命名せられたり

著名墳墓

開山日意上人墓　在鳥邊山通妙寺境内

歴代諸上人之墓　同

淺見綱齋墓　同

山崎闇齋之門人にして世に有名の鴻儒なり正德元年十月一日歿

石田勘平墓　同

丹波桑田郡の人了雲老師に就て性理學を修め又心法の學に篤し世に石門と稱し有名の人也

蒼虬翁之墓　在妙傳寺墓地

成田蒼虬翁は加賀前田侯の臣也嘗て職を辭して出家し俳諧を事とす遂に京都に遊ぶ社友翁を推して東山芭蕉堂の主となす其句の巧妙桃青翁及十哲の後此翁の右に出るなし今に寺に藏すの内一二左の如し

我會式余處は十夜の鉦の聲

赤味噌の澁きを賞むる會式かな

草の風頓て出てくる鵜舟かな

俳句有道の士跡を慕ふて墓に詣づるもの多し其追吊會手向の句有名のもの一二をあけん

されはとて灯もまたはやし秋の暮　芹舍

花の雲仰くも高き日なりけり　楓城

道慕ふ人ならまいれ月の寺　稲處

妙傳寺に詣て

昔しさそ六勝寺あたりはとゝぎす　米僊

琵琶に聞く賴政憐れ五月闇　同人

祝日通上人晋刹兼望法鏡山盛榮　日運

金錫移來丹鳳城、法輪常轉慶祥生、園林次第添光彩、忽到山門究盛榮　見法鏡山隆盛感川端君屬精　日運

休言禪境殁埃塵、茲有非常外護人、忽見園林及堂閣莊嚴倍舊盡清新

方丈庭園碑石二基あり

蒼虬翁會式句　一基

米僊翁昔嘸句　一基

末寺之部

塔中

院名	創立	開基	星霜	世紀

直末

寺號	山號	創立	開山	星霜	位置
妙釋院	應永二十四年六月	實敎院日養	四百八十四年	三十七世	
玉樹院	天文十六丁未年	最上院日顯	三百五十四年	二十一世	
龍嶽院	慶長十七壬子年	龍嶽院日長	二百八十九年	二十五世	
圓立院	元龜元庚午年	圓珠院日仙	三百三十一年	二十四世	
本光院	元和九癸亥年	本光院日安	二百七十八年	十九世	
法華寺	加保山	永亨五年三月	實敎院日養	四百六十七年	兵庫縣下但馬國養父郡加保村
實相寺	眞如山	明應九年三月廿八日	實相院日顯	四百〇一年	但馬國養父郡十三所邑
通妙寺	普耀山	寛永十三丙子年三月	玄收院日惣	二百六十五年	京都府下京都市下京區五條橋東六丁目
深高寺	法天山	文化十酉年三月	智光院日達	八十八年	同縣同國朝來郡佐囊村
實行寺	八木山	長祿元年六月	本實院日秀	四百四十四年	同縣同國養父郡八木村
大運寺	長照山	天文二十三年寅八月	自性院日經	三百四十八年	同縣同國七美郡村岡町
瑞應寺	觀音山	正保二年	瑞應院日甚	二百五十六年	伊豫國溫泉郡針田村
本覺寺	照瑞山	延寶元年正月	惠性院日相	二百二十八年	愛知縣名古屋市大曾根町
蓮經寺	妙法山	明應五年二月	圓敎院日意	四百〇五年	滋賀縣近江國蒲生郡八幡字孫平治町
常榮寺	翠光山	不詳	遠了院日惠	不詳	岐阜縣美濃國安八郡今尾町
妙政寺	長久山	寛永五年三月	怒正院日宥	百九十三年	廣島縣備後國深津郡吉津村
護國寺	了光山	寛永九壬申三月	法性院日勇	二百六十九年	京都府下山城國宇治郡竹鼻村
妙見寺	護法山	不詳	止明院日祥	不詳	同府同國宇治郡大塚村

寺號	山號	創立	開山	星霜	位置
妙蓮寺	法光山	不詳	龍華院日像菩薩	不詳	同府下紀伊郡上鳥羽村
寶泉寺	長久山	文祿二癸巳年八月	妙行院日庠	三百〇八年	兵庫縣但馬國養父郡吉井村
智積院	妙見山	寶曆五乙亥九月	乘要院日尙	百四十六年	京都府五條通鳥邊山
遠照院	佛性山	慶長元丙申年	最上院日賴	三百〇五年	長崎縣西彼杵郡面高村
惠林院		慶長二丁酉年	乘圓院日將	三百〇六年	京都府與謝郡岩瀧村字弓之木
玄祥院		天文七年正月	三寶院日宥	三百六十三年	長崎縣北松浦郡池月村
廢寺					
眞如寺	一乘山	萬治三年六月	寂通院日通	二百四十一年維新際廢寺	城州葛野郡下山田村
觀明坊		不詳	不詳	寛政八年十月廢寺	塔中
正林院		不詳	不詳	寛政十二年四月同	同
寶林院		不詳	不詳	文化十年九月同	同
敎藏院		不詳	不詳	文化十四年十二月同	同
良玄院		天文二十一年	法林院日建	天正年間廢寺	同
本養院		天正二年	緣立院日存	同	同
正善院		同	常在院日明	同	同
眞淨院		慶長十六年十二月	順正院日彌	同	同
惠運院		永祿五年二月	蓮光院日貞	同	同
寶光院		不詳	不詳	永祿九年大火之際燒失廢寺	西洞院四條下ル妙傳寺前町塔中
妙法院		同	同	同	同

光林坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
圓妙坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
法善坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
守正坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
實成坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
寶積院	同	同	同	同	同	同	同	同	同
慶陽坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
乘圓坊	同	同	同	同	同	同	同	同	同
蓮光院	同	同	同	同	同	同	同	同	同

跋

明治庚子の夏我主川端柳雨氏の避暑の爲妙傳寺に寓せらる事數旬偶蘇川安田君の來遊せらるに會し貫主と相計り共に妙傳寺誌を編せらるゝの擧あり余や一己の信徒素より微力菲才其一介の勞を分つ事能はざるは殊に恨事とする處なり然れとも諸賢の盡力今其成功を聞く蓋し遺憾なしと云ふべし顧ふに妙傳寺は洛の名刹關西の身延たり今其寺誌を得此靈場の由來沿革を審にし余等益〻信心以て隨喜の念を深からしむ於戲此寺誌や以て千載に傳ふべく此擧や以て佛天の意に納受あらん聊所感を記して之を贊すと云ふ

明治三十三年庚子八月

河合三石誌之

187
143

明治卅三年十月七日印刷
同　十月十三日發行

非賣品

編輯者　安田貞教

京都市上京區二條川東南門前町六番戸
發行者　本山妙傳寺

右代表者同寺内
朝倉潮龍

同市上京區東洞院通三條上曇華院前ノ町三番戸
印刷者　村上善輔

關西身延妙傳寺誌 全

187
143

019911-000-8

187-143

関西身延妙伝寺誌

安田 貞教／編

M33. 10

ABH-0019